
やくわりぶんたん

境 鏡介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やくわりぶんたん

【Nコード】

N4981H

【作者名】

境 鏡介

【あらすじ】

ある日の夕方。ある日の保育園の風景。

（前書き）

作者自身、この話のジャンルが分かりません。

ブロックの家。

プラスチックの車。

髪を振り乱した人形。

フローリングの床の上には、カラフルな色彩の街が造り出されていた。

部屋の中、照明器具はついていない。

窓からもれる日の光が、闇が間近に迫ったことを告げている。

色とりどりの街並みは、夕日のペンキを撒かれたように朱色に染まり、街を造った者達も、白い顔に夕焼け空を塗りたくっていた。

「がー！がー！」

元々は水色の車を走らせながら、少年は擬音をわめく。

車を上からしっかり掴み、四つん這いで街中を走らせている。

Tシャツに半ズボン姿の出で立ちの少年は、膝小僧を床に押し付けながら、運転に勤しんでいた。

口を尖らせ、集中している様子で、自分の右手を一心に見つめている。

「きよつけてよ！」

と呂律の回らない様子で、両手に人形を持った縮れ毛の少女は言う。

「いえ、こわさないですよ！たっくん、いないのよ」

ヒステリックな甲高い声で、少女は言葉を続けた。

赤いワンピース姿の少女は、プラスチックの携帯電話の玩具を首からぶら下げていた。

少年は自分の世界に入り込んでいる様子で、少女の言葉に返事をしない。

ただ、車の擬音を繰り返している。

少女もすぐに頭を切り替えたようで、2体の人形で遊び始めた。

街の道を、2体の人形が上下に体を揺らしながら進む。

「さあ、おかいものしましょうね」

「あたし、おなかすいた」

「なにがたべたいの？」

「すてーき！」

「やさいもたべなくちゃだめよ」

同じ顔の女性の姿をした人形。

振り乱した髪に、両手を万歳をするように上に上げている。

少女は、人形達を親子に見立てている様子で、会話を続けている。夕暮れの中、買い物を楽しむ親子。

会話に花を咲かせ、ビルの角を曲がった、瞬間。

「キキーツ！！」

けたたましい奇声を上げて、通りを暴走していた車が、親子の眼前に迫った。

「ドーン！」

「キヤツ！」

車の激しい接触音と、女性の悲鳴が同時に、周囲に広がる。

勢い良くぶつかり、両手を上げた身体が空中を切るように舞う。

服はめくれ、髪は巻き上がり、目は見開かれていた。

その身体は、広い通りの真ん中に、頭から落下した。

ゴロンと身体を投げ出し、夕闇に染まる上空を見つめる。

「ママ！」

残された人形が叫んだ。

「だれか、くーくーちゃ！」

舌つたらずの言葉を喚き、少女は少年を睨む。

車の少年はポカンとした表情で、道の真ん中まで跳ね飛ばした人形を見つめていたが、少女の2回目の「くーくーちゃ！」と言う叫びに慌てた様子で立ち上がった。

少年は小走りに部屋の片隅に駆け寄ると、玩具が押し込まれているプラスチックの箱を漁り始めた。

縫いぐるみが投げ出され、プラスチックのレールが放り出される。少年の後ろ姿を、少女はじっと見つめていた。

少年が上半身を箱の中に乗り入れるように、身を折り曲げた時、

「かーくん」

と、呼び掛けながら、ピンクのエプロン姿の女性が部屋の中に足を踏み入れた。

黒髪を後ろでひつつめた女性は、ブロックの街並みを見下ろしてから、箱を漁っている少年に視線を向けた。

女性は笑顔で、

「かーくん。お母さんが迎えに来たわよ」

と、少年に告げる。

体を起こし、少年は無言で箱から離れた。

街のそばに投げ出されていた、小さな肩掛け鞆のヒモを掴み、引きずりながら女性に近付く。

女性は少年の目の高さに合わせるようにしゃがみ込み、

「みこちゃんにバイバイした？」

と、優しく訊ねる。

少年は女性の問いかけに答えず、ゆっくりと身体を後ろに向けた。瞬きもせず、大きな瞳を少女に向ける。

相変わらず、少女は床に座り、片手で人形を握り絞めている。

少女の顔は夕日に染まり、夕日を背にした少年の顔は影を濃くしている。

大きな瞳で見つめ合う、少年と少女。

その目、表情には何の感情も浮かんでいない。

少年が口を開いた。

「バイバイ」

少女がそれに応じた。

「バイバイ」

エプロン姿の女性は立ち上がると、少年の手をひいて去っていった。

廊下を進む2種類の足音が、部屋から離れていく。

少女は、開かれたままの扉をじっと見つめていた。

いまだ、少年が立っているように、視線を注いでいる。

静寂。

少女は不自然なほどにスローな動作で、部屋の中を見回す。

ブロックの街。

荒らされたおもちゃ箱。

投げ出された人形。

人形。

少女は手にしていた人形を床に、置いた。

その手で、首に下げていた携帯電話を掴む。

赤い折り畳み式の携帯電話。

両手で携帯電話を開き、少女は小さな指でボタンを押した。

4、5、6。

ボタンが押される度に、耳につく電子音が周囲に響く。

2、5、8。

少女は、仕上げるように通話ボタンを押した。

空虚な空間をぼんやりと見つめて、耳に携帯電話を押し当てる。

少女は感情をなくしてしまったかのように、棒読みで、言った。

「……くーくーちゃんはきませんでした」

その日、日本のどこかで交通事故があった。

夕暮れ時の街を襲った悲劇。

犠牲者の女性はい死。

救急車は間に合わなかった。

（後書き）

いかがでしたでしょうか？ご意見・ご感想など頂ければ有難いです。
また、他にも何作品か投稿しておりますので、よろしければそちら
もご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4981h/>

やくわりぶんたん

2010年12月31日04時53分発行